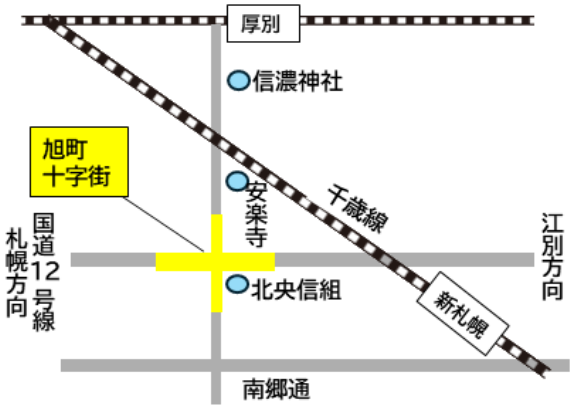
旭町十字街　昭和のにぎわい



旭町十字街とは

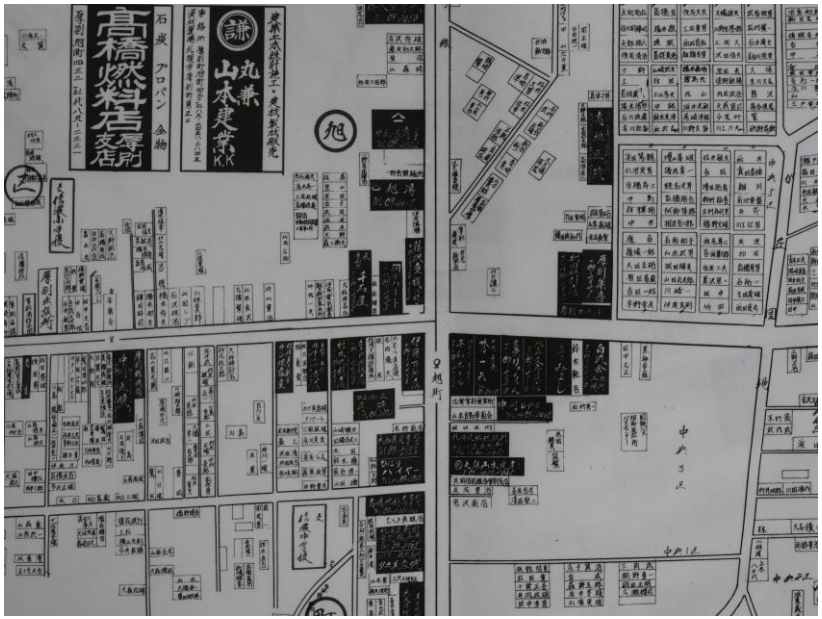
旭町十字街とは、通称・停車場通と国道12号線が交わる交差点付近の呼び名です。

「旭町」という地名は、国道沿いにあった松の大木が「朝日松」と呼ばれていたのに由来するといわれています。だた、朝日松がどこにあったのかはわかっていません。

停車場通は1894（明治27）年に開業した函館線の厚別駅付近から国道12号線に通じる道路で、旭町に大きな農場をもっていた阿部仁太郎（にたろう）が自分の土地を提供し、駅が開業する2年前に完成しています。

停車場通の中でも厚別駅に近いエリアには商店や信濃神社、信濃小学校、寺などが建ち並び、厚別のメインストリートになっていきました。また、国道12号線と交わる旭町には、駅の開業から2年後に阿部仁太郎が厚別郵便局を開設しました。地域で唯一の通信・金融の拠点ができたことは、旭町にとって大きな礎になりました。

そんな旭町が大きく変貌したのは、昭和の高度経済成長期のことです1959（昭和34）年に札幌市がひばりが丘団地の建設に乗り出してからです。この年から入居が始まり、8年間で1000戸余りの大団地ができました。これによって、駅周辺に代わって、旭町十字街が厚別で一番の繁華街になったのです。



1966（S41）年の旭町十字街付近の住宅地図（札幌市中央図書所蔵）





信濃小学校「考古館」とスライド

この展示は、信濃小学校の郷土資料室「考古館」に残されていたスライドを中心に構成しています。スライドは全部で18枚。ケースには「七十周年ころ」（＝1963・昭和38年）と書かれていました。また、「昭和36」とも書かれていますが、1962（昭和37）年に設置された信号機が写っていることなどから、昭和37年の夏に撮られた可能性が高いと考えています。信濃小学校がまだ貴重だったカラーフィルムを使い、札幌のベッドタウンとして変貌しつつある厚別のようすを記録してくれていたことに感謝です。

旭町十字街　昭和のにぎわい



ひばりが丘団地の建設

戦後、深刻な食糧難が次第に改善してくると、代わって大きな問題となったのが住宅不足でした。札幌市は、旧樺太や中国大陸などからの引揚者をはじめ、炭鉱離職者などの転入によって人口が急増。深刻な住宅不足に陥りました。そこで白羽の矢が立ったのが、1950（昭和25）年に合併し、札幌市となった旧白石村の厚別地区でした。札幌市は国鉄が所有していた30ヘクタール余りの土地を買い取り、1959（昭和34）年から8年かけて、1000戸余りの団地を作りました。団地の名前は公募した結果、春にひばりのさえずりが聞こえることにちなんで「ひばりが丘団地」に決まりました。この団地が、旭町十字街を大きく発展させます。



第一土建工業株式会社は
札幌市中央区の建設会社



北村工業所は
札幌市の左官業者





札幌市公文書館所蔵

建てられているのはコンクリートブロック造の住宅です。コンクリートブロック造の家は戦後初めて開発された寒冷地仕様の住宅です。機密性が高くて暖かく、防火性にも優れ、1953（昭和28）年制定の北海道防寒住宅建設等促進法によって奨励されました。公営住宅をはじめ高度経済成長期に大量に供給され、住宅不足の解消や住宅性能の向上に貢献しました。

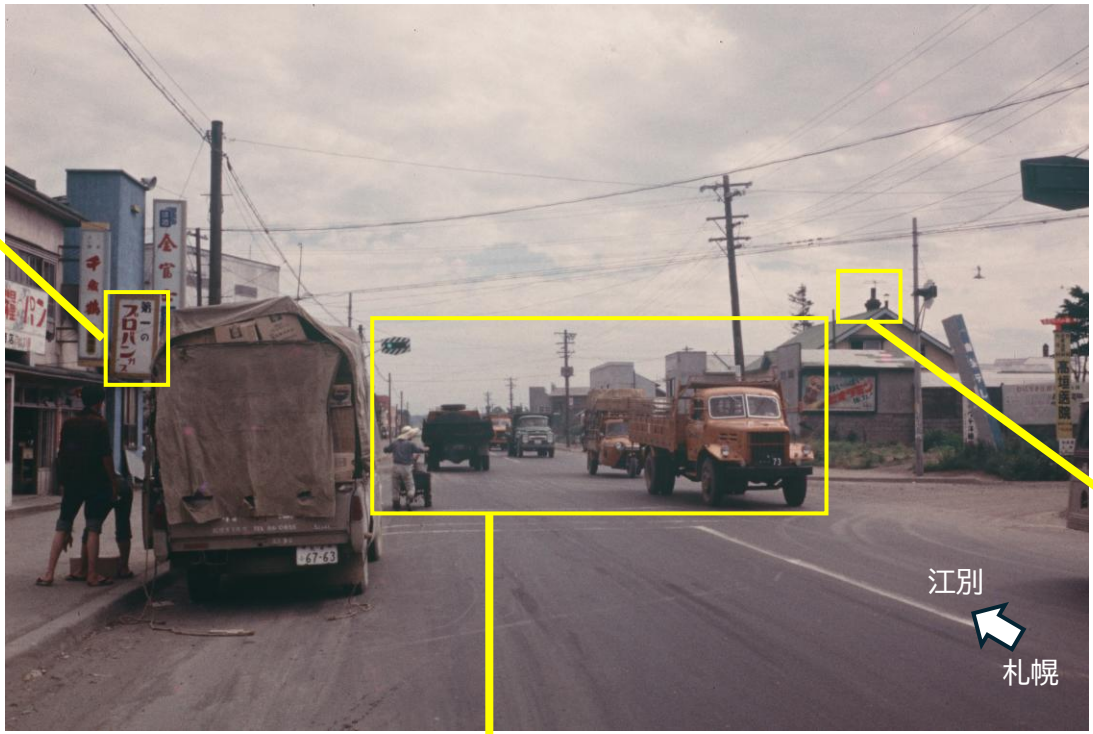
ひばりが丘団地の建設現場は活気に満ち、次々と住宅が建つさまは壮観だったといいます。

旭町十字街　昭和のにぎわい

第一のプロパンガス



1960(昭和35)年に住友石炭鉱業が100%出資して設立した第一興業プロパン事業部の看板です。住友石炭鉱業の特約店を通じて道内一円でプロパンガスや灯油を販売を始めました。炊事などの燃料が薪や石炭からプロパンガスへと代わり、石炭の会社も多角化を迫られていました。会社は現在は「エネサンス北海道」になっています。





国道12号線

1958(昭和33)年までに舗装され、センターラインも引かれています。主な通行車両が乗用車ではなく、トラックだったことがうかがえます。道路左に停車中のトラックもオート三輪も目一杯の貨物を積んでいます。

左の写真の左端には耕運機を押す人が見えます。馬耕から機械へ、農業現場も大きく変わりつつありました。



左の写真と同じ場所の今



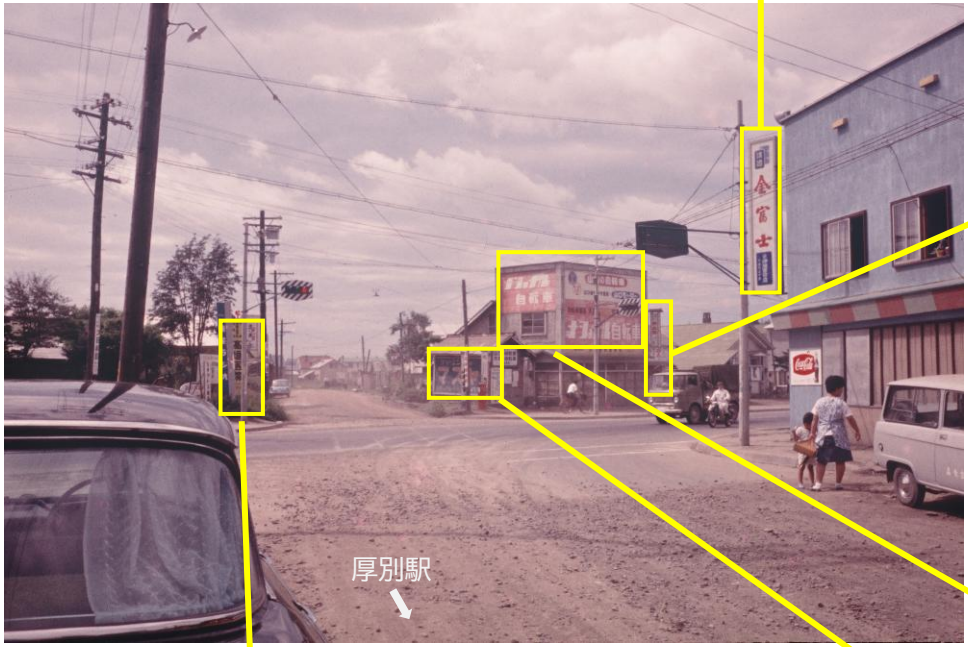
テレビのアンテナ

住宅の屋根には普及し始めたテレビのアンテナが見られます。



左の写真の先にある大行寺付近。左折するルートだった国道を今のように右上の方向に直線化する工事が進められました。

旭町十字街　昭和のにぎわい





神威鶴

1891（明治24）年積丹町で創業した「白方酒造」の酒。会社はその後小樽市に移転。1970（昭和45）年には工場を閉めて製造を委託し販売を続けましたが、1981（昭和56）年に廃業しました。



金富士

南14西9にあった1896（明治29）年創業の老舗酒造会社・中川酒造の主力銘柄。このほか炭酸ガスを含んだ活性酒「銀富士」も作っていました。しかし、やはりビールや洋酒に押され、1970（昭和45）年に廃業しました。



山本自転車商会

ひときわ目を引く赤い大きな看板。大正時代に創業した老舗の自転車店でした。3代目はひばりが丘団地の建設が始まった1959（昭和34）年に跡を継ぎました。自転車の値段は大卒の給料1か月分ぐらいだったといいますが、次々と団地ができて住民が増え、商売は順調でした。バブル景気の頃には1日に40～60台も売れることがあったといいます。途中、道路の拡幅工事のため、店舗は数十メートル札幌よりに移転しましたが、およそ100年、地域とともに歩み、2021（令和3）年に閉店しました。



ラジオ・テレビの広告塔

「東芝ラジオ」と書いてある四角い広告塔の反対側の面には「東芝テレビ」と書かれています。1959（昭和34）年の皇太子（現上皇）の結婚を機にテレビが一気に普及。表裏一体の広告塔は、ラジオからテレビへという時代の移り変わりを物語っています。

マスヤ

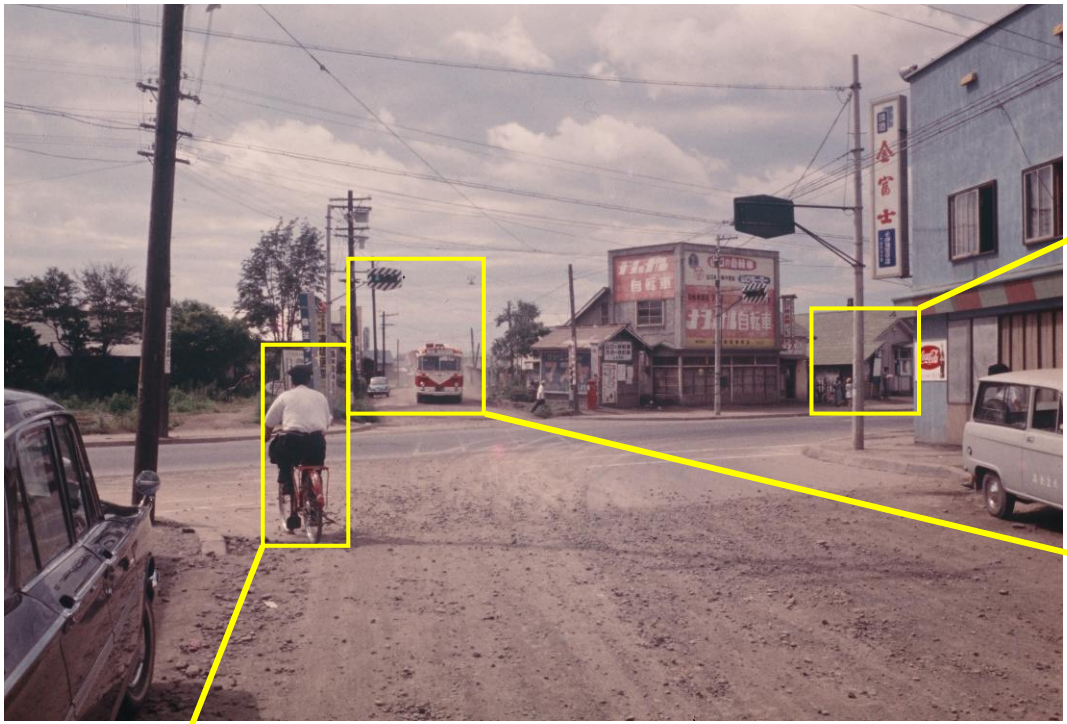
平岸にあったクリーニング店。庶民の間にもクリーニングが普及し、団地住民の増加で需要が増えていたものとみられます。



ラーメン末広

旭町十字街にあった末広食堂。「新札幌市史」によると1960（昭和35）年の厚別地区の飲食店はわずか4軒でしたが、10年後には6倍の24軒に増えています。

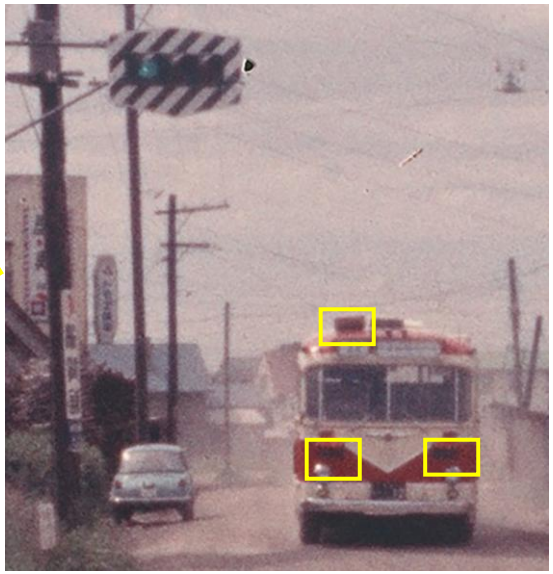
旭町十字街　昭和のにぎわい





北海道電力 厚別電業所

扇子を手にした男性が立っているのは北海道電力厚別電業所（小規模なサービス拠点）の前です。白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機が三種の神器と言われた時代で、道内の家庭の電気使用量は昭和35年からの10年間で約4倍になりました。



市営バス

土煙を上げて走ってくるのは市営バスです。当時は車掌さんも乗っていて、切符を売っていました。前面の黄色い枠の部分は通気口です。当時はまだ冷房が付いておらず、この通気口から外気を入れて暑さをしのいでいました。

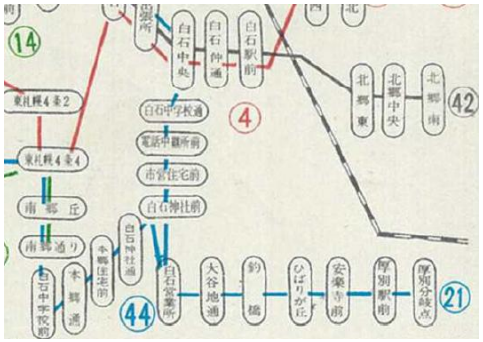


郵便集配係

赤い自転車に制帽、ハンドルの前には黒いカバンが見えます。厚別郵便局の集配係とみられます。当時の厚別郵便局は停車場通沿いの安楽寺の向かいにありました。集配用の自転車やバイクの修理は交差点角にある赤い看板の山本自転車商会で引き受けていたということです。

厚別初の信号機

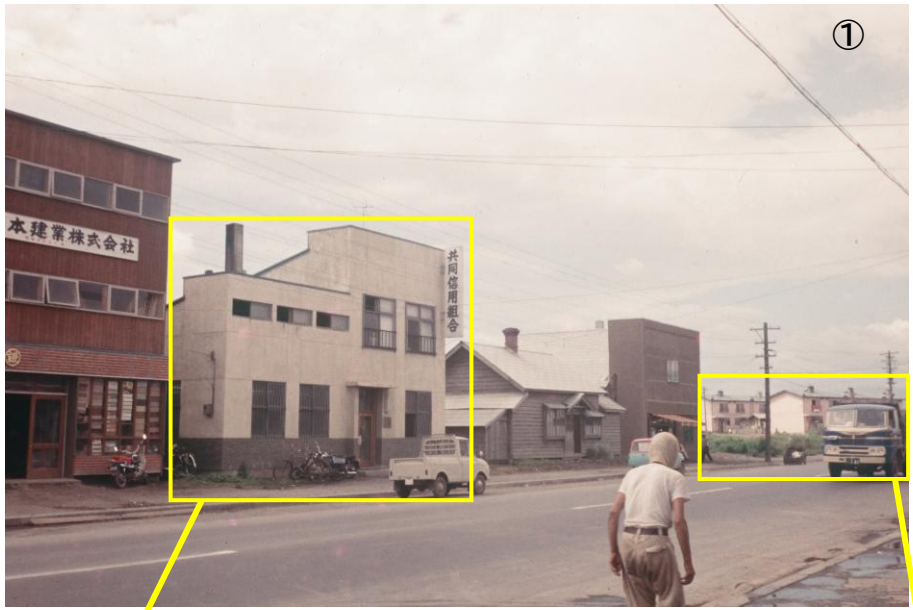
1962（昭和37）年7月15日に設置された厚別区内で最初の信号機です。当時の北海道新聞によると、旭町の町内会では車や人の通行が増えていることから期成会を結成して、道や市に信号機の設置を陳情。地域の820世帯から100円ずつ寄付を集めたり、青年たちがダンスパーティーでお金を募ったりして資金を集めました。足りない分は市の補助金を得て、1年半かかって設置にこぎ着けたとのことです。設置日前日の14日には安全祈願式の後、小中学生300人を先頭に住民たちが渡り初めをして祝いました。



1963・昭和38年の市営バス路線図

左は1963（昭和38）年の市営バスの路線図です。「ひばりが丘」というバス停があったのが確認できます。その市営バスより早い時期から厚別・江別などと札幌市中心部を結ぶ路線を運行していたのが国鉄バスです。ひばりが丘団地の住民の通勤・通学を支えていました。

旭町十字街　昭和のにぎわい

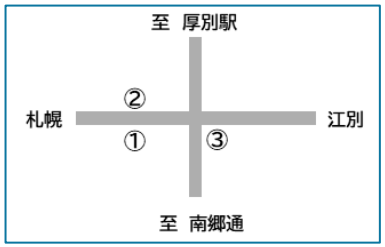




共同信用組合

1953（昭和28）年に民間の金融機関としてはいち早く旭町250番地に出張所を開設しました。2年後に支店に昇格。1960（昭和35）年には同じく旭町の写真①の新店舗に移転しました。さらに1967（昭和42）年には旭町十字街の角に移転しています（下の写真）。共同信組は1999（平成11）年に事業譲渡され、北央信用組合になりましたが、厚別支店は引き継がれました。

このほか、北海道拓殖銀行も、1963（昭和38）年に旭町にひばりが丘出張所を開設。6年後に支店に昇格しています（1982・昭和57年移転して大谷地支店に改称）。遡れば、1896（明治29）年に厚別郵便局が開設されたのも旭町でした。旭町は厚別の金融機関揺籃の地でもあります。





北央信用組合の厚別支店は現在建て替え工事中です。来年秋には同じ場所に新店舗ができる予定です。

ひばりハイヤー

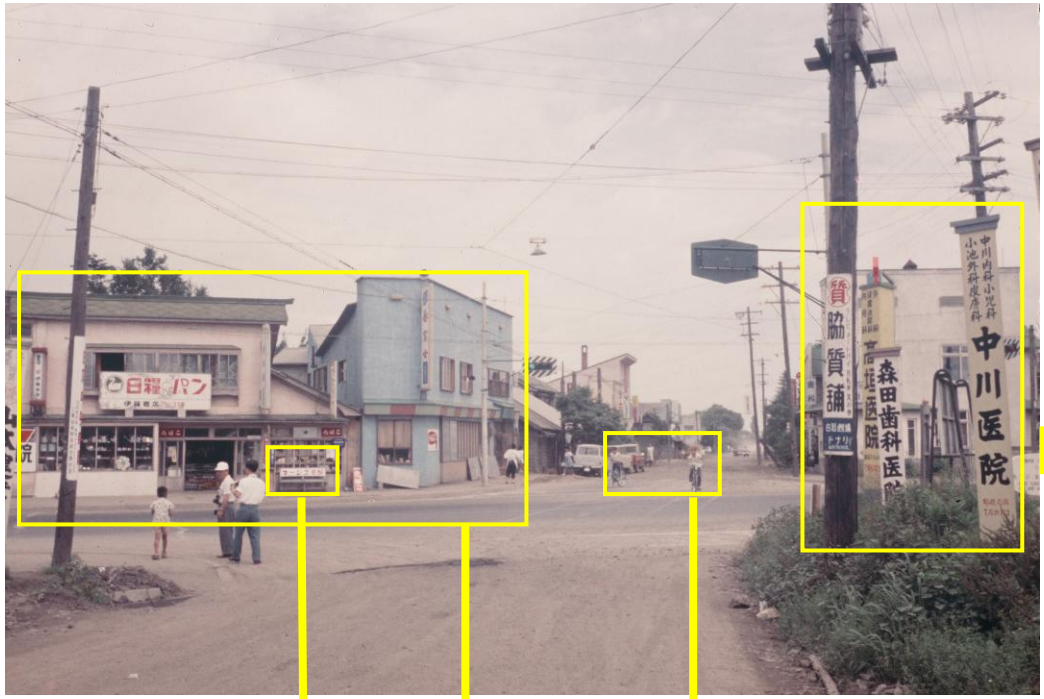
①の写真の向かいにあったのが②の写真の会社です。①の右下の地面が濡れています。②を見ると、それが洗車の水であることがわかります。

ひばりハイヤーは1960（昭和35）年に阿部家が旭町に設立したタクシー会社です。設立時期や社名からして、ひばりが丘団地による人口の増加を見込んで開業したものとみられます。まだマイカーを持っていろ人が少なかった時代、住民にとっては便利な新しい交通手段となりました。



写真の右奥に写っているのは国鉄の官舎です。今のアークスのあたりに、国鉄バスの操車場があり、そのそばに運転手などが住んでいました。

旭町十字街　昭和のにぎわい







一番左の写真と同じ場所の今

目立つ病院の広告塔

多くの広告塔が立っています。中でも目立つのが病院の広告です。1961(昭和36)年に国民皆保険制度がスタート。さらにひばりが丘団地が作られ人口が急増したことから、厚別でも病院の開業が相次ぎました。



ネージュ石鹸
(ベンチ広告)

札幌市西区にあった洗剤メーカー北光油脂の製品。札幌の地場製品として人気があり、狸小路では歳末大売り出しの景品にもなっていました。

伊藤商店

旭町十字街で一番大きかった商店。もともとは左の日糧パンの看板が掲げられた店舗だけで、酒やたばこ、塩、食料品、日用雑貨などを幅広い商品を販売していました。量り売りも行われていたといいます。のちに水色の店舗が増築され、八百屋や肉屋、魚屋、惣菜店がテナントとして入り、住民の台所として繁盛しました。



自転車の少年たち

学帽をかぶった少年など2人が勢いよく自転車をこいでいます。山本自転車商会で買ったものでしょうか。少年たちの表情まではわかりませんが、当時自転車はまだ高級品だっただけに、得意顔で乗っていたのかもしれません。



中川医院

1960(昭和35)年、停車場通の安楽寺の向かいに開業。中川院長の内科・小児科と義弟の小池外科皮膚科がありました。前に止まっているのは往診用の車でしょうか。今も同じ場所に、息子さんが営む中川循環器内科があります。



現在の中川循環器内科

旭町十字街　昭和のにぎわい



1969（昭和44）年6月の旭町十字街　（札幌市公文書館所蔵）

前のパネルの写真とほぼ同じアングルで撮られた7年後の旭町十字街です。商店が格段に増えています。国道12号線だけでなく、停車場通も舗装され、横断歩道の白線も引かれています。バスの運行本数が増えたほか、マイカーも普及してきて、交通量が増えたことが見て取れます。町並みの変化の大きさ、スピードに驚かされます。

昭和40年代、ひばりが丘団地に加え、青葉団地も完成して人口が急増し、旭町十字街はいっそうにぎわいました。この写真の2年後には十字街の商店を中心に厚別商店街振興組合が設立されました。組合員は120人を数えました。夏祭りではやぐらを組んで盆踊りが行われ、そのにぎわいは今も語り継がれています。

旭町にとって転機になったのは、1973（昭和48）年の国鉄・新札幌駅の開業でした。これを機に新札幌周辺の開発が本格化します。1977（昭和52）年にサンピアザとスーパーがオープン。その5年後には地下鉄東西線が新さっぽろまで延伸され、デパートもオープン。加えて国道12号線などの幹線道路沿いに大型店が相次いで出店しました。旭町は客足を奪われ、廃業したり、新札幌に移転したりする店が相次ぎました。厚別商店街振興組合も組合員が減少し、2003（平成15）年に解散しています。

また、地下鉄延伸の年には住居表示（条丁目）の導入と地名変更により、「旭町」は厚別中央となり、旭町の名前はバス停などに残るだけとなりました。

明治時代、厚別のにぎわいはこの写真の奥の方にある厚別駅付近から始まりました。そして、昭和の高度成長期、この十字街を最も輝かせ、さらに新札幌へと引き継がれました。旭町十字街は時代のうねりや地域の移り変わりが交錯した「歴史の交差点」でもあります。